2018年度　卒業論文

　　　　　現代のイスラエル徴兵制度の実態

　　　　　　　　　　２０１８年０１月１８日

　　　　　　　　　　慶応義塾大学

　　　　　　　　　　　　総合政策学部４年

　　　　　　　　　　　　７１４０１６０７

　　　　　　　　　　　　　大久保 会

目次

第一章　はじめに　　　　　　　　　　　　　　　　　３

１−２研究の目的　　　　　　　　　　　　　　　　　　３

１−３研究の背景・事前調査　　　　　　　　　　　　　３

第二章　本論　　　　　　　　　　　　　　　　　　　７

２−１調査方法　　　　　　　　　　　　　　　　　　　７

２−２インタビュー　　　　　　　　　　　　　　　　　７

第三章　考察　　　　　　　　　　　　　　　　　　１８

第四章　結論　　　　　　　　　　　　　　　　　　１８

第五章　参考文献　　　　　　　　　　　　　　　　１９

第一章　はじめに

　私は中学、高校時代にイスラエルに住んでおり、少ない期間ではあったが徴兵にも参加したことがあった。その経験をふまえ、イスラエルを客観的、そして主観的に見ることができると言う理由でイスラエルを研究の題材として用いた。本研究の最大のテーマは、兵役がもたらす葛藤や利点を同世代の退役軍人の方々にインタビューし、兵役の必要性と兵役がもたらす個人の将来の影響を調査することだ。

１−２　研究の目的

　本研究の目的は徴兵制度を若者にとって意味のある制度にすることだ。　徴兵制度が若者に与える影響は大きい。その多大な影響を受けながらも退役後はまるで何も無かったかのよう生活をしなければならない人が多い。我々日本人は大半が２０代後半で社会に出る中、イスラエルでは二十代後半で大学に入学できれば良い方だ。それにも関わらず、企業や国は若者に学歴を求める。そういった矛盾の中でイスラエル人の若者は生きていかなければならない。この実態を疑問に思っている若者がイスラエルでは大半である。この研究を通して、徴兵制度とは若者にどのような影響があるのか、人生においてイスラエルの若者に必要なのかを兵士のインタビューやアンケートで調べたい。

１−３　研究の背景・事前調査

-イスラエルの徴兵制度

　イスラエル軍の徴兵は基本的に１８歳から行われる。平均的に男性は３年、女性は２年で兵役を終えることが出来たが、男女は平等であるべきだということで男女共に２年半で兵役を終えることが出来るようになった。

　軍隊の入隊前には約一年をかけ軍隊専用のテストを受ける。テストの一日目は、身体検査とＩＱテスト、身元調査を行う。その結果から様々な部隊に入隊する権利を得ることができる。この初日は約６時間、みっちりと検査される。身体テストでは約２時間かけて尿検査、身長、体重、骨格などを見られ、１から１００までの数値が振り分けられる。８２以上であれば戦闘員になれるが、どれだけ意欲があっても７０を下回ると戦闘員になることを許されない。ＩＱテストでは言語、図形の読み解きを基本的に行う。言語はヘブライ語が原則で、移民の子供は対応言語があればその言語でテストを行うことが出来る。日本語のテストはない。テストの問題は日本で行われているＳＰＩの問題に近い。単語の読み解き、長文の読解などが約１時間行われる。図形の読み解きは、積まれているキューブの数を数える問題や、図形の隠されている部分を読み解く問題を約一時間かけて解いていく。高校生の子供には長く、集中力の切れる子供も多い。身元調査では個室に面接官と一対一で尋問を受ける。少々緊張感があり、嘘を付くことは許されない。質問としては住んでいる地域、家族構成から家の部屋数、友達の数まで聞かれる。その他にも性格テストのようにリーダーシップや協調性を見る質問もあり、最後にはどの部隊に入りたいかを希望することが出来る。質問の対策を練ることは出来るがいくつも同じ質問をされるので嘘をつくとすぐに気づかれてしまう。これらのテストを受け、ＩＱと適正を出される。このテスト初日で配属できる部隊が絞られる。

　その後、テスト結果が家に送られ、個人の国防軍アカウントを貰える。このアカウントから求人やテストの日程が送られてくる。約１年かけ、テストを積み重ね軍隊の仮配属先がきまる。仮と言うのは、入隊後もテストを積み重ねるので配属しても落とされることがあるからだ。

　徴兵すると最初の3ヶ月ほどはほとんど家に帰ることが出来ない。一番多くて２８日間の連続勤務があるがそれを超えることは基本的にない。半年が経てばある程度の配属先がわかり、後輩が入隊するので少々休むことができるようになる。このように少しずつ昇格をしていき3または２年の徴兵を終える。部隊によっては3年以上残ることができるが3年を超えればやめることができる。最長で４９歳まで兵役を続けることができる。

-国民と戦争

　私がどのイスラエル人に話しを聞いても大半以上が『私たちは戦争を中心にその周りを生きている』と言っていた。軍に対しての税金などの金銭面の援助、徴兵制などの人的援助、戦争中の住居の援助、すべてを国と国民が共同で行っている。私が住んでいる時に実感したのは戦争による国民の一体感だ。

　イスラエルは建国当初から戦争の中におり常に戦争と暮らしている。戦争が人生の中で大きな意味を持っていた。もちろん戦争に関わりたくなくても戦争と向き合っていかなければならない状況にいる。徴兵前の子供たちはやはり国を守っている人ということで兵士を憧れの目で見ることもある。しかし戦争を理解し始める中学生になると多くの生徒は徴兵に向けて遊び始めることが多い。私が中学時代にイスラエルにいた時は皆が口を揃えて「徴兵前の息抜き」として学校よりも思い出作りや部活を頑張り始めていた。高校に上がると軍隊のどの部隊に行きたいのかという話しを始めた。まるで日本の就職活動のようだった。イスラエルの軍隊は今後の生活にも関わることがある。パイロットになりたい学生は空軍に入り、エンジニアになりたい学生は情報部隊に入る。このように徴兵の配属先によって徴兵後の人生や職業が大きく分かれることもある。徴兵中も部隊によって待遇が違い、つく役職によっては高校時代の先輩が部下に回ることもある。そのため、高校時代は体力作りや学問に励み出す。日本の受験勉強に似ており、自分の意思で明確な目標を持っている者もいれば、目標をも持たずに義務的に行っている者もいた。

　私が徴兵のテストを受けていたときは５回ほどテスト受け配属先を決められた。配属先は自分で提出し、そこから軍が配属先を考慮する。私は海外から来たということで給料が上り家賃を払ってくれるような待遇もあった。そして海外から単身で来た兵士は養子としてイスラエルの家庭に入ることができ、祝日には旅行や自分の家族の旅行の分まで出してくれることが多い。屋台やレストランでは兵士価格もあり国民全体が兵士を助けていた。一番印象的だったエピソードは兵士が疲れ果てた状態でバスに乗り込んだときに80歳ほどのおばあさんが兵士に席を譲っていたことだ。この光景を目の当たりにしたときに兵士は国民にここまで愛されているのかと実感した。国民の大半が徴兵を経験するので、兵士の気持ちがよくわかるのが大きな理由だと考える。そのおばあさんは自分も自分の息子も孫も徴兵をしたので疲れる気持ちがよくわかると言っていた。日本人からしたらあまり考えられないことだった。

-事前調査

　　今回この研究を行うにあたって１０６人の同世代（１９歳—２２歳）にいくつかの項目を質問させていただいた。この１０６名は私の高校の同級生やイスラエルで知り合った友達が中心だ。私自身イスラエルでは都市部と北部の田舎に住んでいたこともあり、様々な人種と経済的状況の子供に聞くことができた。アンケート内では親の年収などを聞き出すことが出来なかったが、同級生ということもあり、家の大きさや親の職業で経済的階級を考慮した。１つ目は自分の所属部隊、2つ目は自分が軍隊に徴兵されて軍隊の必要性があると感じたか、３つ目はビジョンをもって入隊したかだ。

　まず１つ目の質問では２４人が戦う部隊、いわゆる戦闘部隊として入っており、約２５％を占めていた。この中で１６名が平均的または下流階級の人間で戦闘員の３分の２を占めている。そして７４人が軍隊に入っているが戦闘部隊ではなくサポートをする部隊に入っている。この中で６１名が平均的または下流階級の人間でサポート部隊の約８２％を占めている。そのサポート部隊の中でも富裕層の人間は全員が待遇の良い空軍または情報部隊に入り、軍隊内でステータスの高い部隊に配属されている。そして徴兵を免除された人が８人おり、彼らはスポーツの特待生、芸能活動を行っている人、身体の問題で徴兵されなかった人がいた。スポーツ特待生の２名をのぞき残りは富裕層の人間であった。軍隊では特化したもの、身体の問題、徴兵に入りたくない人は免除され、奉仕活動を行うことが多い。これらの振り分けは高校３年生の時点で検査や試験をもって決めている。

　2つ目では回答の多くがイスラエルについてもっと深く学べている、自分がイスラエルの一員として実感しているという回答が多かったが、必要性があると答えたのは４６人だった。しかし４６人中イスラエルに住んでいなかったら軍隊に入っていないと言う回答が半数以上で多かった。戦闘部隊に入っていない人の中には軍隊での自分の必要性が分からない役職にいると答えた。しかし軍隊を退役した人、軍隊で退役が近づいている人のほとんど全員が軍隊は最初を除けばためになっており自分がとても成長したと感じていると答えた。

　3つ目の回答では８９人がビジョンを持って入隊したと回答しており、芸能やスポーツ特待生を除くと８３名。彼らのうち半数は就職を見据えて軍隊に入隊している。そして残りの回答には親のようになりたいと答えた人もいた。

　このアンケートで分かったのは大体の人間が軍隊に戦うために行っていないと言うことだ。イスラエルでは軍隊は将来を少なからず左右するもので、戦いに行くというよりも今後の人生設計において不可欠なものとなっていることが再確認できた。そして、富裕層の階級の人間の約８割が軍隊内のステータスの高いエリート部隊に配属されている。ここで言うエリートと言うのは、軍の中でも一目おかれている部隊のことで、空軍のパイロットや、海兵隊、情報部隊幹部や諜報員などのことを指す。

第二章　本論

２−１調査方法

　同世代の退役軍人の中で、中流から下流階級の戦闘兵士、中流階級の事務員、裕福な家計で育ったエリートの３名をピックアップしインタビューする。３名とも私の知人であるため経済的状況は分かっていた。

　大まかな質問内容としては１.プロフィール、2.なぜその部隊に入ったのか、3.入隊前の退役後のビジョン、4.６ヶ月ごとの軍隊生活の流れ、5.困難、6.学んだこと、7.退役直後に抱いた自分のビジョン、8.今の自分について、9.懲役がどうあるべきだと考えるか。これらを軸に質問していきたい。調査対象者全員の入隊時期が６ヶ月以上ずれないこと、各調査対象の部隊が違うこと、性別が偏らないことだ。

２−２インタビュー

１.プロフィール

Ａさん　男性　　２３歳

陸軍　　戦車部隊　　２０１３年１１月入隊

イスラエル北部の地方に住み中流以下の暮らしをしている。学力も高くなく運動が出来る訳でもない。父親はトラックの運転手で母親は家の近くのスーパー勤務。

　２０１７年７月１２日　インタビュー実施

戦車部隊の補足

戦車部隊はイスラエル軍の中でも底辺の戦闘部隊で兵士の中でもエリート層は少なく出世することが少ない。

Bさん　女性　　２２歳

陸軍　　サポート部隊/事務職　２０１３年１１月入隊

イスラエルの都市部に住む平均的な家庭。学力は平均以上、小学校からダンスを習っている。父親は宝石販売をしており母親は学校の社会科の教師。

２０１７年１０月２６日　インタビュー実施

事務部隊の補足

事務部隊は基本的に女性が多く、基地によって富裕層が多い基地や貧民層の多い基地がある部隊である。女性の大きい割合が事務部隊に配属される。

C さん　男性　２２歳

情報部隊　ＩＴ系諜報員　２０１３年６月入隊

イスラエルの都市部に住み裕福な家庭で暮らしている。学力は高く、高校時代にロボットコンテストの全国大会、世界大会に出場するほどＩＴに特化していた。運動はある程度でき、入隊前の１年間ほど入隊テスト対策の塾に通っていた。父親は貿易会社の社長で母親は美容サロンを経営している。同級生の中でもトップクラスに裕福な家庭で暮らしていた。

２０１７年１２月２９日　インタビュー実施

情報部隊の補足

情報部隊はイスラエルの中でも有名な部隊で、多くの学力的テスト、身辺調査を行う。その中でもトップクラスなのがモサドなどの諜報部隊がある。ＩＴ系の部隊に入ると退役後の就職先に困らないとイスラエル国内でも有名で、命の危険も犯すことが少ない。

２. なぜその部隊に入ったのか

Ａの回答

父親が元々戦車部隊に配属されており、兄も戦車部隊に入隊したため、自分も父親や兄のようになりたいから彼も戦車部隊に入隊した。特に学校の成績も良くなく戦闘員にならなければ良い就職先も見つからない。戦闘部隊の中でも戦車部隊に興味があった。

Bの回答

女ということもあり戦闘員にはなりたくなかった。元々軍隊で頑張って出世しようという気持ちも無かったので、なるべく楽で家に帰りやすい部隊を選んだ。他に志願していた部隊があったがテストで落とされ、やむを得ずその部隊に入った。

Ｃの回答

元々パソコンが好きで軍隊でもあまり身に危険をさらしたくなかった。父親は空軍でパイロットをやっており、エリートで、兄も海兵隊員でエリートなのでエリート部隊に入ることを目指し、１年ほど対策した結果受かったのが情報部隊だった。

３. 入隊前の退役後のビジョン

Ａの回答

父親のような男性になりたいというのが大きなビジョンだったが、具体的なビジョンは特になかった。その時は軍隊生活の不安が大きく先の未来はあまり考えていなかった。しかし重機などの操縦、整備を学べるので就職に直結するとは少し思っていた。

Bの回答

特に明確なものは無いが大学に入ってなるべく早く就職したいと思っていた。世界の若者と比べても大学に入る時期が遅いので入隊前から少し焦っていたのと、２年間も徴兵をやりきることが出来るのかという不安で特に退役後のことは考えられていなかった。

Cの回答

もしも徴兵で学ぶことが多く充実していれば徴兵後も軍隊に居座ろうと思った。しかし軍隊に入ってもテストで落とされることがあるのであまり未来は想定できなかった。

４. ６ヶ月ごとの軍隊生活の流れ

４−１.最初の６ヶ月

　Ａの回答

入隊最初の６ヶ月はしごきの時期で、規則や規律を叩き込まれた。ここで担任の４分の３ほどが違う部隊に降格される。訓練内容としては基礎体力作りから始まり、戦車についての勉強、模擬訓練だ。

　はじめの体力作りでは自分の体重の約半分の荷物を持ちながらの長期ランニング、実弾での射撃練習、３時間置きに交代しながらの基地の見回りを毎日のように繰り返していた。基本定に２週間に一回帰宅することかでき、食事はある程度毎日とることが出来た。３ヶ月を過ぎたあたりで戦車について学ぶようになる。まずは部品説明、戦車の基礎情報、メンテナンスの行い方、入隊５ヶ月では既に運転練習を行いすぐに実践に向けた模擬訓練が始まる。この時期からしごきは辛くなくなり訓練は毎週同じルーティーン化する。しごきの最後の１ヶ月は訓練がまた辛くなる。最初に行っていた重量の荷物を持ちながらの長期ランニングに加え、戦車のテストが行われた。しごき最後の一週間では基地に帰らず外で眠り少ない部隊に別れていくつかのミッションを行う。戦車での模擬戦争から走り、けが人を想定した対処、夜間の見回りを行い一日の睡眠時間は多くて３時間の生活をおくる。最後の一日は荷物と仲間を交互に担ぎながら２０キロほど走る。この時にはしごきの終わりが見えて、ある程度安心している。２０キロを走り終えたゴールには、家族や部隊の偉い人々が顔を出しセレモニーを行う。このときは喜びよりも早く帰りたいと思った。セレモニー後は約１ヶ月ぶりに帰宅し１週間の休暇を得た。この６ヶ月の給料はつき約１万５千円だ。この６ヶ月で軍隊のシステムや生き方を学んだ。

Bの回答

　入隊最初の３ヶ月はしごきの時期だった。規則や規律の勉強、戦闘員でもないのに走らされ、銃を持って移動させられた。戦闘員と比べると全然非にもならないくらい楽で、体育の授業を一日中やっている気分だった。教育係の兵士も戦闘員出身では無いため特に辛い訓練もないが、その期間は２度しか家に帰れず、食べ物もまずかった。長官には人として扱われなかったので精神的ダメージは多少あった。

その後の３ヶ月は新人として軍隊に勤務する。私の最初に配属された部隊は雑務作業をする部隊だ。コピー、コーヒー入れ、掃除、先輩雑務の補助などだ。週に２〜３度のペースで運動がてらランニングをさせられ、月に１度のペースで射撃練習があった。業務自体退屈だが、同世代の人間と寝泊まりが出来、小さいときから見ていた軍隊の作業を行えることに関心をしていた。１〜２週に１度土日に帰ることができた。身体的にも精神的にも辛い部分は特に無く、料理にもなれていた。この６ヶ月の給料は約１万円だった。

Cの回答

　入隊最初の１.５ヶ月はしごきの時期で、規則や規律を学んだ。自分は情報部隊だったので、しごきの時期は短く、銃を握る練習と軍隊のシステムについての勉強が主だった。毎週末家には帰れた。食事はあまり美味しくなかったが、同世代の人々と愚痴を言い合って生活しているのは楽しかった。

　しごきが終わると４ヶ月の研修期間があった。私はＩT系の研修と言語を学ばされた。基本的なＩT操作を知らなければならない部隊だったので基本的な研修というより実践的な訓練をした。詳しい業務内容は言えないが、相手の国の情報を調べたり、ＳＮSの情報を監視したりする作業をやらされた。言語はアラビア語を学んだ。基本的にアラビア語の情報を調べるので毎日数時間の勉強を叩き込まれた。研修期間は一番下の階級なので１万円の給与で生活した。少々生活が変わったことによってストレスはあったが徐々になれて、あまり苦労しなかった。

４−２. ６ヶ月〜１年

　基地に戻ると新人が入り、初めて後輩が出来る。昇格後に次の部署を決める。新人教育部署や、戦闘部署、メンテナンス部署などがある。彼は戦闘部署を選んだ。ここからは訓練も落ち着き、上下関係もある程度柔らかくなる。訓練は基本的に実践形式の訓練で、戦争に備える。月に２度ほどきつい訓練があるが基本的に２週に１回は帰ることが出来る。入隊７ヶ月が過ぎた時に訓練が厳しくなり始めた。ガザ侵攻戦争が始まったからだ。戦争の発端はイスラエルの青年３名の拉致事件だ。２０１４年７月８日政府が戦争を発表した。基本的に入隊して間もない兵士は戦争に出ることが無いが上司が多く戦地に行ったため基地はピリピリしており、緊張感と不安があった。７月の中旬から若い部隊も戦地に行くことが発表された。戦地に行くことが決まると親への報告、遺書の記入をする。この時初めて軍人であることを意識した。家族に兄弟がいる場合半強制的に戦地に行くことになる。兄は先に戦地に行っていたらしく無傷であった。戦車の部隊はあまり死者数が出ないため妙な安心感があった。８月に入ると戦地入りをした。初日から作戦の会議に出て、前線にたった。戦地にいた期間は約２週間だった。あまり詳しく覚えていないが自分は２つの建物を破壊したことを覚えていた。中に何人入っていたかは分からないが、確実に人はいた気がしたという。この二週間は人生で一番辛く、思い出したくないと言っていた。同学年で戦地に行ったのは彼が最初だった。初日に戦地に出て初めて戦地を見た時に始めてはいけないことを始めてしまったと思った。未だに人を殺してしまったかもしれないという現実を実感していないという。感覚的には正当防衛のような感覚で、自分の戦車に銃弾があたった時に撃たなきゃ死ぬと思ったそうだ。知り合いも数人亡くなり部隊からも死者が出たという。２０１４年８月２６日に一時終戦し、その日からまた日常に戻った。最初の数週間はトラウマよりもアドレナリンが出ていて、寝付きが悪く常に興奮状態だった。しかし落ち着くと一気に無気力になり軍隊生活が無意味に感じ始めてという。この時期イスラエルの国民もとても落ち込み、悲しいムードに包まれた。彼自身はイスラエルの北部に住んでおり、イスラエル南部の戦争だったので家族を心配しなくて済んだのが唯一の心の支えだったという。そしてこの日から自分の戦争観が客観的から主観的に変わったという。この期間給料は上がり戦地にいたことで手当を含め約２万５千円を貰った。

　この戦争の後訓練はある程度落ち着き入隊１年を過ぎた時に彼は教育部署に移動した。

　Bの回答

　　６ヶ月が過ぎ新人が入った。階級も上がり、後輩が出来た。後輩はしごきの時期なのであまり業務は変わらず、実質仕事をしている中で自分が未だ一番下だった。毎週家に帰れるようになり、休みの週末は働いていたので売店で食べ物を買うことが出来た。なので、食べ物には困らず同期とも親密になり苦労はなかった。この時戦争が始まりそうだったので基地内がピリピリしており、不安は漂っていた。戦争の期間は偉い長官達が戦地に行き、電話対応などが忙しくなったが、階級がまだ低いので多くの業務は先輩が行っていた。３ヶ月が過ぎると多くの先輩が除隊し、後輩も業務に加わるようになった。戦争が停戦し、私は秘書になり、１人の長官についた。上下関係は少なく、電話でのアポイントメント対応や長官のお願いする雑務をこなした。今考えると一番忙しい時期で、戦争終わりの後処理を軍が行っていた。私は電話対応以外の大半を後輩に任せることができた。外に出て体を動かすことはほとんどなく、基本的にずっと座っていた。一年間近になると毎日家に帰れるようになった。元々基地から近いのもあったが、基本的に事務員で１年間近になると毎日家に帰れるのは稀ではない。朝８：３０から１７：００前後に家に帰るようになる。まるで仕事のようになっていく。この時、給与は１万５千円で、それに含め週末のアルバイトで７万円ほど貰っていた。

Cの回答

６ヶ月目からは既に業務が振り分けられていた。成績の良い人はそのまま戦地の情報収集や、戦闘に深く関わる業務を行っていた。私も成績が良かったのでそのまま部隊に残ることが出来た。残れなかった者はイスラエル軍の兵士の情報収集や、SＮSの監視を、ひどい場合は事務作業の部署に飛ばされる人もいた。

　情報収集の業務は常に違うことを行い、楽しかった。人によっては電話の盗聴や、ひたすら監視カメラを見る仕事の人もいたが、私の業務は楽しく、忙しくても自分が好きなパソコンをずっと触ることが出来るので幸せだった。業務的には詳しいことを誰にも話せなかったり、FacebookなどのＳＮSの名前を替えたりと、秘密が多かった。給与は１万５千円で多くはないが、基地の料理は悪くなく、勤務先も都会なので料理を頼むことが出来、不自由は無かった。

４−３. １年〜１年６ヶ月

Ａの回答

　教育部署所属になった私は、教育部署は入る前に教育方法を学んだ。彼のように戦闘員から違う部署に異動することはよくある。自分の環境をかえたい者や、自分の将来を考えて異動する者も多い教育方法を学ぶ基地では多くの同級生や先輩がおりとても有意義だった。まるで高校時代に戻ったようだった。練習も体力より頭脳を使い、よるも６時間以上眠れた。もうこれ以上戦地に関わりたくないという気持ちが芽生え、早く退役したいという感情になり始めた。訓練としては模擬授業を開き、厳しくなることを覚えた。特に戦車について学ぶことは無く様々な部隊の教育部署と共になった。入隊して１年と３ヶ月を過ぎ教育部署に入った。新人のしごきから自分の小さい部隊を持ち、共に訓練をした。まるで一年前の自分の思い出に浸っているようだった。そこから毎３ヶ月ごとに同じことを繰り返した。新人を迎え、鍛え、送り出す。その繰り返しだった。ここで若い隊員を教えることが楽しくなり将来先生になりたいと思い始めた。しかし同じことの繰り返しもつまらなく戦車の運転以外にもトラックの免許をとりたいと思い始めた。

Bの回答

１年を超えて長官とも信頼関係が生まれミスもしなくなった。このときから少しずつ除隊を意識するようになった。高校時代の先輩などが除隊していき未来を不安視しはじめた。軍隊の学問援助のカリキュラムを取ろうとするが自分にあったカリキュラムが無く、自分で家庭教師を雇い、大学に向けて勉強し始めた。軍隊の業務も後輩に任せるようになり、１年６ヶ月を間近に、長官の秘書を後輩に任せ、秘書をまとめるチーフになった。この時期から１０：００までに基地に行き、問題が無いか確認したら帰る生活を続けた。短いときは４時間で帰ることもあった。家ではバイトをしたり、大学に備えた勉強をしたり、同世代で既に除隊した人と夜遊びに出かけたりと、入隊前の生活のようになっていた。このときも給与はほとんど変わらず、食事も基地では食べず外でランチをしていた。

Cの回答

　一年が過ぎ後輩も増えたが、業務的に変わったこともなかった。

しかし戦争が始まり情報部もとても忙しくなり始めた。詳しい情報は言えないが、戦略室に呼ばれて会議に参加することもあった。自分自身に危害が加わる業務ではないが、同級生や地元の仲間が戦争に行くことがとても多く、私たち情報部隊のミスで仲間が死んでしまったらと考えるとストレスと不安が大きかった。忙しさは変わらなかったが、空気はピリピリしており、戦闘部隊の死人もたくさん出た。休戦後も情報部隊は休むこと無く、常に同じ業務を続けた。この時期に私は徴兵後も軍隊に残ろうと決め始めた。きっかけとしては、この業務が自分にあっており、軍に勤務をすれば給与も良いからだった。

４−４. １年６ヶ月から２年

Ａの回答

父親もトラックの運転手だったので入隊期間中に免許をとることを決意する。軍隊では資格などを無料で学び取得するカリキュラムがありそこに入った。業務は平行して行い特に変わったことは無かった。

Bの回答

この最後の６ヶ月は特に何も変わらず、後輩に全部任せた。しごきの時期の後輩をたまに見る程度で業務に変わりはなく、つまらないという感情もなく、淡々と業務をすすめ、家に帰り働いて遊ぶことを繰り返すだけだった。

Cの回答

　昇級試験を受けることを決意した。昇級にはテストと訓練がある。テストと言ってもイスラエル軍の細部の仕組みを学ぶことが主で、部下が出来る時の対応や、業務の教え方、業務自体が大きく変わる訳では無いが、高い室を求められようになる。戦術室にも入ることが増える。責任は大きくなるがやりがいはあった。

　訓練は無事終わり、昇級できた。昇級後も変わらない毎日を過ごしたが、精神的ストレスは少なく、上下関係の問題も一切無かった。

４−５. ２年から除隊まで

 Ａの回答

２年を過ぎたところからトラックの免許も取得し、教育部隊をいくつも持つようになった。階級も上がりそこからは毎日同じ生活をしながらも将来を考えた。何になりたいか、退役後何をするか常に考えた。２年９ヶ月で彼は退役した。教育員になってからは一律約２万円の給与だった。軍隊で貯金したのは約２５万円。今の大学生が頑張れば２ヶ月以内で稼げる額だ。

 Bの回答

２年と１ヶ月で正式に除隊した。元々縛られた生活はしていなかったが除隊してもっと休みが増えアルバイトで働いた。貯金は５０万円前後あり除隊後６ヶ月で貯金と親からのご祝儀を含め８０万円ほど貯めてすぐに海外旅行にいった。

Cの回答

業務は変わらず２年９ヶ月が過ぎ、懲役期間を終えたが、あと１年残ることを決めた、給与は懲役時の最大２万円の給与から、懲役をやめて仕事として軍に入ると１８万円まで上がった。車は支給され、福利厚生も素晴らしかった。残りの一年を過ごし、徴兵と兵役を終えた。退役した私は、インタネットや情報の分野の修士号を軍隊の訓練の過程で取っており、業務をしながら大学に通っているようなものだった。退役後、海外に旅行に行き、今はＩＴ系の会社に勤務している。面接で自分の部隊の名前を言っただけで即採用だった。

５.困難

Ａの回答

一番の困難は戦地にいたときよりも最後の６ヶ月だった。毎日がつまらなく無駄な日々を過ごした。この時期にもっといろいろ学びたかった。しかし入ったときの規律から一気に開放されて怠け者になった。

Bの回答

 困難は戦争時のピリピリとした雰囲気と一番多かった雑務だった。戦争の雰囲気が人生で一番感じられ、精神的に滅入ったという。その他は特に困難は無く、楽しみの方が多かった。

Cの回答

正直最初の１．５ヶ月以外辛いことは無かった。辛いと言っても良い経験で、今でもしごきの時期の友達と仲がよい。得る者の方が多く楽しむことが出来た。

６.学んだこと

Ａの回答

 学んだことは戦車の運転とトラックの運転だけだ。あとは、軍隊はゲームと一緒で没頭すればレベルを上げられて楽しいけど、飽きるともうやりたくなくなる。考え方次第では凄く辛い訓練も精神的には辛くなくなる。ただゲームと違うのは死んだら終わりで殺しても終わることだ。

Bの回答

 パソコンの業務、人のマネージメントを特に学んだ。書類のまとめ方、人のスケジュール管理は人生で一度もやったことが無く、軍隊でまだ１９歳にして軍の中級の長官の生活を管理するのは新鮮で働いていて多くを学んだ。

Cの回答

人の動かし方、人の心の読み方を学んだ。大きな組織の中でどのように成功し、どのように生きるのかが一番大きな学びだった。ＩＴの技術面も上達したが、今の自分の業務には大きく役立ってはいない。しかし、軍隊という歯車の中で経験したことは、今の仕事で大きく関係している。

７. 退役直後に抱いた自分のビジョン

 Ａの回答

 退役直後も何も未来のことは考えなかった。特に役立つことも学んでいないし、教職につく情熱も退役時にはさめていた。ある種の無気力状態だった。真っ先に考えたのはお金を稼いで旅行に行くことくらいだった。

 Bの回答

 大学に行こうと決めていたが退役してすぐには大学に行きたく無かった。アジアの貧民地域の生徒に英語を教えにいこうと軍隊にいたときの友人に誘われ東南アジアに行くことだけは決めた。

Cの回答

兵役後すぐに勤務先を見つけることが目標だったが既に達成できた。今では仕事もあり、都会で一人暮らしすることも出来ている。どこに行っても働ける肩書きがありとても満足している。今後はアメリカの大学でビジネスを学びたいと思っている。

８. 今の自分について

 Ａの回答

 ある程度落ち着いてあまり軍隊のことは考えていない。同級生や同期が退役してきたので毎日バイトをして遊んでいる。大学に行く気もないし親の家業を継ぎたいと思っている。たまに戦争の時を思い出すがどうしても戦地にいた時に経験したことはトラウマになっている。特にエリートでも無かったのでイスラエル北部のキブツで静かに暮らしたい。

 Bの回答

 現在ベトナムのNPOで働いており、同世代の退役軍人でベトナムの小学校の講師と生活の手伝いをしている。今後この知識を生かして大学に入り、イスラエルの貧民地区の親のいない子供の寮を運営するNPOに入ろうとしている。軍隊で長官の面倒を見る係だったので軍隊と少しつながることがありとてもためになっている。

Cの回答

勤務もしているし、健康だし文句はない。周りは海外旅行に行っているが私は既に学位と職があるので一歩先に進んでいる気分で満足だ。軍隊で学ぶことは学べたし、良い経験も出来た。家族も幸せそうで幸せだ。

９. 懲役がどうあるべきだと考えるか

 Ａの回答

 徴兵は今考えると良かった。良い経験だった。でも子供にはさせたくない。もっと大人になって退役すると思ったけど、軍隊が終わればただの高校卒業生と同じ感覚だ。徴兵であるべきだと言う考え方も今では古くなっているし、徴兵制度を終わらせることが今のイスラエルの課題だとおもう。強いて言うならもっと退役後の面倒や、退役後の進路相談をする人が欲しかった。そして２年半でもやっぱり長過ぎる。

 Bの回答

 軍隊では良い思い出が多かった。同じ部隊に富裕層も貧民層もいてある程度同等に扱われていた。しごきの時期は皆人間以下だと言われるこの時どの階級の人間も平等に扱われる。自分が裕福では無いにも関わらず、住んでいる地域は富裕層が多くてコンプレックスだったが、軍隊で平等に扱われ自分の本当の自己価値がわかった。２年間の徴兵は長かったが、学ぶことや、職業体験のようで貴重だった。戦闘員の就職は良いというが、本当のエリート層だけだ。逆に事務職の方が充実していて、事務職のエリートの方が圧倒的に就職している。エリート層以外の戦闘員が恵まれないにも関わらず国はエリートだけを後押しする。それならば徴兵する意味は無いと思う。徴兵が無ければ今の自分はいないし、精神的にも大人になったがそれが徴兵である必要は無いと思う。

Cの回答

正直徴兵は人生の中で一番人に必要とされ、自信もついた。私の業務は特別だったが、一度入ってイスラエルのことを学ぶのは良いことだと思う。そしてイスラエル全国から来た男女の同世代と、一緒に最悪な設備の場所で住むと勝手に仲良くなる。様々な階級の人と同じ目線で話せて素晴らしかった。私は是非子供にも行かせたい。

第三章　考察

 この３人の話しを聞くとＡの方が待遇も悪く将来性の少ないように思える。Ａは兵士として育てられ、Bはビジネスウーマンとして育てられ、Cは学位も習得していた。軍隊内の部隊的ステータスで言うとＡの方が戦車部隊でBよりも上だが、Bの方が階級は上になっている。Cのように、退役せずに徴兵後も兵役を続けた人は少なく無いそうだ。というのも、３年の兵役を超えた時点で軍の待遇も階級もCのように飛躍的に上がる。しかし、兵役を続ける為にはある程度の功績や能力、コネが無いと良い部隊と高待遇で軍隊生活を続けることは難しい。Cには良い部隊に入る能力があったので、軍の中で居続けることが出来た。しかし、ＡとＢは軍にいる理由が無いと感じ除隊している。私から見ると残りたくても残れる環境にいなかったと感じる。彼らと同じく、未来の見えない退役軍人は自分探しとして、基本的に３ヶ月から１年ほど海外旅行に出かける。その旅行に飽きたら大学に行くための勉強をすることがほとんどだ。博士号を取らなければ就職先の見つからないイスラエルでは２０代後半に職業を見つけることが出来れば良いとされている。Cは部隊の階級も能力も高く２３歳で既に職がある。彼のような人は珍しいが、Cのように学位を兵役中に取る人は少なくない。

第四章　結果

　今回インタビューした３名以外にも私の同級生や周りの友人に話しを聞いたが、徴兵制度に肯定的意見を持つ人の方が多かった。徴兵は辛いが経験にはなっている。今回インタビューしたＡのようにトラウマを抱き目標を亡くす人は少なくない。

　徴兵が良いのか悪いのかは、今回のインタビューや私の徴兵経験では断言できなかった。しかし生まれ育った環境や財力が入隊に大きく関係しているのは間違いない。下流階級で育った子供がエリート部隊に入り、退役時にはエリートになっているケースは少ない。上流階級の子供は良い部隊に入らなくても良い大学に入りエリートとして過ごす。徴兵制度は平等で公平であることが大前提で無ければならないと感じた。

第五章　参考文書

י-יב מדינה בונים (イスラエルの歴史の教科書)

ynet news http://www.ynetnews.com/home/0,7340,L-3083,00.html

news 2 israel http://www.mako.co.il/news

IDF イスラエル国防軍公式サイト http://www.idf.il/english/